

## 天軍賛歌「グローリヤ」



【新改訳 2017】ルカの福音書 2 章 11～14 節

- 11 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。
- 12 あなたがたは、布にくるまって飼葉桶に寝ているみどりごを見つけます。それが、あなたがたのためのしるしです。」
- 13 すると突然、その御使いと一緒におびたしい数の天の軍勢が現れて、神を賛美した。
- 14 「いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。」

### ベレーシート

●プロテスタントの讚美歌(106 番)や聖歌(138 番)の「折り返し」部分には、「グローリア・イン・エクセルシス・デオ(Gloria in excelsis Deo)」ということばが繰り返して歌われますが、これはラテン語で、2 章 14 節の御使いの賛歌の前半の部分だけです。後半の部分はなぜか歌われません。おそらく、後半の部分のことばは前半が 4 つのことばから成っているのに対して、後半は 4 つと 3 つで 7 つのことばから成っているからだと思われます。つまり、音楽の構造的な制約に収まり切らないためと思われます。しかし、カソリックのミサで「通常文」のテキストとして歌われるこの賛歌では、14 節のすべてのことばが歌われています。以下はラテン語のテキストです。動詞のない詩文となっています。

Gloria in excelsis Deo	いと高き所に、栄光が 神に
Et in terra pax	(そして) 地の上に 平和が
Hominibus bonae voluntatis	みこころにかなった人々に

ギリシア語では、以下のとおり。

ドクサ エン ヒュブシストイス セオー カイ エピ ゲース エイレナー エン アンスローボイス ユードキアス  
Δόξα ἐν ὑψίστοις θεῶ καὶ ἐπὶ γῆς εἰρήνη ἐν ἀνθρώποις εὐδοκίας.

●救い主誕生という喜びの知らせが、主の使いによって羊飼いたちに伝えられるや否や、天の軍勢が現れて、神を賛美する大コーラスが響きわたりました。御使いの賛美とはいかなるものか、そこに居合わせた羊飼いたちしか知りませんが、その内容を考えるなら、天の御使いたちが賛美した理由は二つあります。一つは天にある神の栄光のゆえです。もう一つはその栄光が地上に現された神のみわざのゆえです。

## 1. 天軍賛歌は「同義的パラレリズム」

●この賛歌の特徴は詩篇にみられるように、ヘブルのパラレリズム(並行法)が使われているということです。つまり、2行からなる文節において、最初の行の内容が次の行で、別の言葉一同義的、反意的、総合的—で置き換えられる修辞法です。ルカ 2 章 14 節のパラレリズムは、一見、反意的並行法に見えますが、実は、同義的並行法です。

●この天軍賛歌 2 章 14 節の他の訳を見てみると、柳生訳では「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、神に喜ばれる人にあれ。」とあります。「みこころにかなう人々」と普通訳されるところを、柳生訳では「神に喜ばれる人」と訳しています。永井訳では「いと高きところには栄光神にあれ、また地上に平和、人には喜悅あれ。」と訳していますが、とても味わい深い訳です。ちなみに、永井訳では、新約にある「みこころにかなう」という箇所をすべて「悦ぶ、喜びを得たり、喜びとする」と訳しています。

●ネストレ版によらないギリシア語原文である「エターナル・ライフ・ミニストリーズ」出版の新約聖書では、「最も高き所には神の栄光があるように。地上には平和が、**人々の内には、よしとされる思いがあるように。**」と訳されています。特に、太字で記されている部分が重要です。なぜなら、人が神によってそのような状態にされることが福音であり、かつ、神の栄光になるからです。

●「みこころにかなう」と訳された「ユードキア」(εὐδοκία)は新約で 9 回。動詞の「ユードケオー」(εὐδοκέω)は新約で 21 回。英語では good pleasure. いずれにしても、「天にある神の栄光」と「地にある平和」と「人の喜び」がひとつに繋がっている、ひとつとなっていることが、この賛歌のすばらしいところと言えます。

## 2. 天における神の栄光

●「栄光」という言葉は神にのみふさわしい言葉です。英語ではグローリー—glory、ギリシア語では「ドクサ」(δοξα)です。「ドクサ」はヘブル語の「カーヴォード」(כבוד)です。「栄光」と訳される「カーヴォード」の本来の意味は「重い」ということです。つまり、永遠の重みのある事柄、重みのある神の世界を意味します。そうした永遠の神の重みが御子をとおしてこの世に現されたのです。私たちが御子イエシュアをとおしてこの神の重みに触れるとき、永遠の神の栄光にあずかるとも言えるのです。

●詩篇 19 篇 1 節に「天は神の栄光を語り告げ」とあるように、天においては、永遠に神の重み(栄光)がたたえられています。ヨハネの黙示録には、ヨハネ、四つの生き物、24 人の長老たち、御使いたち、全被造物、主の花嫁が頌栄をささげています。そこには多くの頌栄用語—栄光(Glory)、力(Dominion)、誉れ(Honor)、感謝(Thanks)、力(Power)、富(Riches)、知恵(Wisdom)、勢い(Strength, Mighty)、賛美

(Blessing)、救い(Salvation)一が見られます。7つの頌栄(1:6/4:9/4:11/5:12/5:13/7:12/19:1)の中で必ず登場する用語は「**栄光**」ということばのみです。ですから、これらの頌栄用語を「栄光」という一語で代表することができるかもしれません。つまり、「天は神の栄光を語り告げ」とあるのは、そこには、カモ、蒼れも、富、知恵・・・といったことが含まれていると考えてもおかしくはないということです。

●神の栄光、すなわち、神にとっての「重い事柄」とは何でしょうか。それは、神が天と地を創造される前から持っておられた「重い事柄」です。それは、**神が人とともに住む**ということではないでしょうか。それはかつて「エデンの園」という形において実現しました。ところが、人が罪を犯したことによって、エデンの園から追放されてしまったのです。だからといって、神の重い事柄である「神と人がともに住む」ことを神が放棄されたわけではありません。それをどのようにして回復し、実現するかを、神は長い時間をかけて、また選民イスラエル、あるいは教会を通して、幕屋、神殿、教会、御国、メシア的王国という概念を通して啓示されました。これらはすべて**神と人が共に住む神の「家」**の概念です。

●その神の栄光(重い事柄)が、神の第二位格である御子イエシュアをとおして、この地に現わされることが、地に平和(シャーローム)をもたらすことと同義と考えることができます。そして地にいる人々が喜びを得ることができるのです。

### 3. 地には平和

●「平和」はギリシア語で「エイレーネー」(εἰρήνη)ですが、これはヘブル語の「シャーローム」(שָׁלוֹם)の訳です。ちなみに、「シャーローム」の語源は動詞の「シャーレーム」(שָׁלַם)で、神のご計画が完成する、実現するという意味があります。「シャーローム」は**神の栄光の地的表現の総称**とすることができます。

- ①神、国、人に対してはそれぞれ「平和、和解、和平」
- ②個人的には「心の平安、平穩、安心、安全」
- ③商業的には「繁栄」
- ④肉体的、精神的には「健康、健全」
- ⑤生命的には「充足」
- ⑥学問的には「知恵」
- ⑥宗教的には「救い」
- ⑦究極的には「勝利」

●こうした意味合いをもっているのが「シャーローム」です。永遠の神の栄光がこの地上に現わされるとき、そこには「シャーローム」が実現されていくのです。天の御使いはこの「シャーローム」を喜ぶことができますが(ルカ 15:7, 10)、それそのものを自ら経験することができません。なぜなら、御使いは自ら悔い改めて御子による贖いにあずかることが出来ないからです。神の栄光にあずかり、シャーロームを経験

することができるのは、御子イエシュアを自分の救い主であることを信じる者たちです。

●イザヤが預言した「平和の君」(イザヤ 9:6)は、使徒パウロによって「キリストこそ私たちの平和」(エペソ 2:14)と宣言されています。「平和」は福音の重要な事柄です。「平和」とは、天と地、神と人、ユダヤ人と異邦人など、人間の罪が作り出す「隔ての壁」を打ち壊して、二つのものを「一つにすること」です。

【新改訳 2017】エペソ人への手紙 1 章 10 節

時が満ちて計画が実行に移され、天にあるものも地にあるものも、一切のものが、キリストにあって、一つに集められることです。

●天の軍勢によって、「いと高きところには栄光が、地には平和が」と語られたように、クリスマスの出来事、すなわち「救い主」の誕生は、御子イエシュアの誕生によって**天にあるものも地にあるものも、一切のものが、キリストにあって、一つに集められること**を告げ知らせているのです。つまり、天にある神の栄光が、御子によって地において実現するということの良き知らせなのです。キリストによってこそ、この宇宙にあるすべての「隔ての壁」が打ち壊されて、天と地が一つになることを、私たちは深く、重く、受け止めなければなりません。神の栄光はまさにそこに輝くのですから。

2019.10.16